Sep. 30, 2016
AFC@Kitakyushu

「国史たちの対話」　三谷発表の要点

対話を促進するため、用意した日本の教科書の分析のほかに、いくつかの論点を加える。

1．日本における高校歴史教育課程の改訂

現在、進行中。枠組みは今月に公表され、現在、文科省・中教審はパブリック・コメントを受付中。来年初頭には学習指導要領として公表される予定。

高校の歴史地理は、「地理総合」と「歴史総合」が必修教科となり、その上に「地理探求」「日本史探究」「世界史探究」が設けられる予定。

「歴史総合」は、1）世界史と日本史を融合させ、2）近現代史に絞り、3）アクティブ・ラーニングを推奨する点に特徴がある。その目的は、グローバル化の時代にあって、日本の未来世代が世界の中で生き抜くための、生きた知識とスキルを身につけるように導くことにある。

三谷は、かつて日本学術会議の史学委員会に設けられた高校歴史教育に関する分科会で、同僚たちとともに、同様の狙いの下に、「歴史基礎」という科目を設けるように提案したことがある。今回の中教審案は狙いと基本枠で同じであり、その点は大いに歓迎する。

しかし、その具体的な枠組みには懸念を覚える。中教審は、近現代史を、「近代化」「大衆化」「グローバル化」の三本柱で択え、この順序で教えるとしている。私見では、この順序は、「グローバル化」「近代化」「大衆化」であらねばならない。（学界では、今まで通り、時間的経過に沿って、世界の諸事件をもれなく記述すべしという意見もあるが、2 単位の授業で生徒に理解させることは不可能と思われる）

その第一の理由は、日本の近代化はグローバル化により初めて可能となったという事実にある。19 世紀半ばにアメリカ使節が来日しなかったならば、「近代化」が起きたはずがない。これは日本近代史の専門家の共通意見である。

また、「近代化」の内容として、産業化と民主化を想定しているようだが、日本の場合はいずれも外発的だった。産業化は江戸時代の間に基盤ができていたが、日本に近代科学は存在しなかた。民主化もまた、欧米のモデルなくしては想像不可能であった。

したがって、「近代化」の発端には、どうしても 19 世紀半ばに西洋が急激に推進したグローバル化を置かねばならない。日本の近代を開いた明治維新はアメリカ使節の来航を発端とするが、彼を送り出した国務長官は、それによって「諸大洋を蒸気船で結ぶ最後の鎖」が完成すると期待していたのである。

第二の理由は、グローバル化は 19 世紀以来、現在まで一貫して強まってきた、連続的で不可逆の trend だという事実である。中教審はグローバル化を第二次世界大戦後に始まるとしている。その細部はいまだ公表されていないが、これが急激に加速されたのは internet ができてからである。しかし、その前にも、いくつも重要な画期があった。

日本に即していえば、次の節目として、20 世紀初頭のいわゆる「帝国主義」が無視できない。国民の居住地から離れた他言語・他文化の社会を支配し、帝国を作るという世界的流行に、日本は台湾領有を皮切りに加わった。これが自ら招いた 1945 年の敗戦まで継続したことは、日本と近隣諸国との関連で無視できない事実のはずである。「帝国主義」が「近代化」の一部だと言えないことはないが、そうすると産業化や民主化といった国内の、しかもそれ自体重要な現象の意義を隠してしまう。「近代化」をほとんど「近代史」全体と同じにしてしまったら、説明用語としては空虚になる。

日本史における次のグローバル化の節目は、第 1 次世界大戦後、ヴェルサイユ講和会議や国際連盟に加わり、一応、big powers の一員と認められたことである。その次には、中国だけでなく、東南アジア・太平洋に支配の手を伸ばし、さらに西洋の ABCD 諸国と戦った事実がある。これを「近代化」や「大衆化」で説明できるのだろうか。

その後の節目は、サンフランシスコ講和条約、日韓条約、日中共同宣言などによる国際社会への復帰である。しかし、それ以後はインターネットによる全球通信連結やそれを基礎とする世界金融市場の成立などのように、日本だけの現象ではもはやなくなった。真のグローバル化はそこに始まる。とはいっても、上にふれたいくつかの現象は、「近代化」「大衆化」では到底説明できるものではないだろう。

このように、中教審の案はグローバル化の扱いにおいてかなりの問題をはらんでいる。とはいえ、グローバル化を、19 世紀中葉の全球交通通信網の成立、帝国主義、国際組織の成立、インターネットの各段階に分け、それぞれの箇所に書き込めば、ある程度、難点を緩和できるかもしれない。それらを「近代化」や「大衆化」の枠の中に挟み込んでゆくような度量が中教審にあるようにと、切に願うばかりである。

2．現行日本史教科書の中の世界・東アジア記述

発表論文の要点を述べる。

（1）日本での歴史の研究・教育は、日本史と外国史で分断されている。高校の歴史教育も例外でない。

（2）しかし、高校の「日本史」教科書を分析すると、そこには外界の記述が、約 4 分の 1 も含まれている。この傾向は、最大の販売数を誇る山川『日本史 B』でも、他の教科書でも同様である。それを支える認識は、山川の序文では、こう述べられている。

「日本史は、私たちの住む日本列島の中での人々の歩みを探るものであるが、その歩みはさまざまの地域との交流の中で、その影響を受けつつ展開してきたものである。したがって私たちは日本史を学ぶ場合、いつの時代についても、周辺の国々をはじめとする各地域の歴史や日本と諸外国との関係に目を向けていく必要がある」。

（3）時代別では、外界の記述は、多い順に「近現代」、「原始古代」、「近世」、「中世」の順である。

（4）外界の記述が「鎖国」時代と目されてきた「近世」に多いのは意外であるが、それはキリシタンの流入と排斥を始めとする「西洋」との関係を重視しているためである。この西洋重視は山川に顕著だが、清水書院はむしろ近隣関係の方を強調している。

（5）外界で注目している地域は、原始古代や中世では東アジアと仏教の源泉だったインドだけである。近世以降は東アジアより西洋の方が多い。東アジアの中では、中国の記述が圧倒的で、朝鮮の記述は比較的に少ない。

（6）外界との関わりで注目している分野は、原始古代では文化の移転が主で、中世では民間の貿易がこれに加わる。どの時代でも、戦争を含む外交の記述が多いが、近現代では約 4 分の 3 に上る。

（7）日本史研究の学界では、東アジアとの関係の重視がここ数十年の流行であった。最近では、明治維新について、西洋や国学の影響だけでなく、近世後半での漢学の普及が話題になっている。

（8）しかし、研究者や教育者の多数派のメンタリティーは依然として閉鎖的で、「歴史総合」もこの点が最大の難関となりそうである。

３．隣国の国内史を互いに学ぶ

「国史たちの対話」は、東アジアの未来を考え、そこに平和を願うとき、必要不可欠な課題である。しかし、その目的が共有されたとしても、それを実現するには、留意すべき点がいくつもある。

ここでは、ただ一点に注意を促したい。この会議への提出論文では、主に、自国と隣国との関係について、自国内にどんな理解があるかに注目が集まっている。国際関係とその認識への注目は、20 世紀前半での日本と隣国の関係、それが遺したトラウマを思えば無理もない。

しかし、私たち東アジアの住人は、隣国の姿をどれほど知っているのだろうか。趙先生が書かれているように、お互い、「もう分かっている」で片付けていないだろうか。私は以前から、この三国の知識人たちの欧米への関心の熱烈さと隣国への無関心との対照に、深い懸念を抱いてきた。互いに知るためには、国際関係ではなく、まず相手の国がどんな文脈、歴史的に形成された特徴を持っているのかを知らねばならない。

日本について言えば、しばしばその「国民性」が語られる。しかし、永久不変の「国民性」はあるのだろうか。中国や韓国では、日本人の攻撃性や侵略志向が「国民性」、永遠不変の本質として語られることが多いようである。しかし、事実を指摘すれば、日本は秀吉後の 200 年以上、外国と戦ったことがない。1945 年以後の 70 年も同様である。20 世紀前半、約 50 年の日本の近隣侵略は、永遠不変の「国民性」と言えるだろうか。

他方、今の日本人は議論が嫌いである。韓国人や中国人のように、論点を明確に述べ、反論を繰り返すことは回避する。これは、「国民性」と呼んでよいかもしれない。起源をたどれば、「徳川の平和」にたどり着く。近世日本人は外国人との接触もなければ、発展もあると期待していなかった。そんな社会に生まれ落ち、育った人々は、ひたすら日々を楽しく生き、「小さな幸せ」を求めようと、他人との紛争を極力回避するようになった。戦国時代まではそうでない。今の日本人は紛争回避という「国民性」を江戸人から相続しているように思われる。韓国もついて同様の特徴を挙げると、「礼」の秩序があるだろう。

要するに、「国民性」論による理解はかなりが疑わしい。問題は、隣国の民の歴史を虚心に眺め、どの点で持続性があり、どの点で変化しているのか、きちんと見分けることである。研究は無論のこと、学校教育でも、具体的な事例に即して、そうした努力を始めてほしい。隣国の歴史を、分かったつもりにならず、互いに虚心に学び合う、それが「国史たちの対話」の、究極の課題であろう。

日本の国史（研究/教科書）において語られる東アジア

三谷 博

はじめに
１．高校教科書における世界と東アジア
　　１）『詳説日本史 B』山川出版社、2015 年
　　２）他の教科書：東京書籍、清水書院
２．日本史の研究動向
むすび

はじめに

日本の歴史研究および歴史教育は、いずれも日本史と外国史とに二分されている。それはいま生きている日本人の世界観に大きな影響を及しているように見える。すなわち、日本とアジアを含む世界とを別物と見なし、「日本は世界（アジア）の外にある」という世界観である。

筆者は、グローバル化の進む世界でこうした世界観を維持することは不適切と考え、近年、日本学術会議の史学委員会の中で、高等学校の歴史教育のなかに日本史と世界史を融合した「歴史基礎」という科目を新設すべきことを提唱してきた。現在、文部科学省はこうした提言を参照しつつ、次の学習指導要領において、類似した枠組の下に「歴史総合」という科目を必修科目として新設することを検討している。

ここでは、しかし、現行の日本史教育が日本の外界、とくに東アジアをどのように扱っているのかを、主要な教科書を素材として分析し、その内容を確認した上で、将来における日本史の研究と教育の理想像を考えてみたい。

１．高校教科書における世界と東アジア

日本の高校教育では、日本史と世界史は科目として分断されており、かつその履修者は必ずしも重なっていない。現行の世界史は制度上は必修であり、したがって日本史の履修者は世界史をすでに学んでいるはずであるが、実際にはそうでもない。大学受験に力を注いでいる高等学校の中には、世界史を教えていない学校がある。また、国立大学を受験するために必須の大学センター試験では、「歴史地理」の三科目の中で、日本史の受験者が最多で、地理が二番手、世界史は最も少ない。したがって、現在の高校生の中には世界史を学ばないで、あるいは学んでも忘れて卒業する者が少なくないのではと懸念される。未来の世代が日本の外部の歴史に無知になることは望ましいことではなく、それが「歴史総合」を設けようという動きの出発点となっている。

では、現在、大学受験者の多くが学んでいる日本史の教科書では、世界と東アジアはどう記述されているのだろうか。はたして、日本史は外界と切断されて書かれているのだ

ろうか。以下では、これを、三つの代表的な教科書に即して分析した見よう。

１）山川出版社『詳説日本史 B』2015 年

この教科書は日本で最も売れている教科書で、いま 60%を越える市場占有率をもっている。したがって、将来の日本人の歴史観に対する影響力も大きいはずである。

統計の結果を紹介する前に、日本史教科書の時代区分を簡単に説明しておこう。「原始･古代」「中世」「近世」「近代･現代」という四分法である。教科書であるから文部科学省の規定する『学習指導要領』に従っているわけであるが、学界においてもこの四分法は長く使われてきた。これは、西洋における「古代」「現代」「中世」という三分法に、日本の事情を勘案してもう一つの時代区分を追加してできたものである。

日本史の「近代･現代」とは、西洋との関係の緊密化により始った「近代化」の時代である。物理的時間としては、中国での「近代」「古代」二分法における「近代」と同じである。一方、日本史の「古代」とは、言わば日本の「古典文明」が築かれた時代である。3 世紀頃における国家の形成から始り､8 世紀における律令国家の確立を頂点とする時代で、中国では魏晋南北朝から唐、韓半島では三国時代から新羅にかけての時代に相当する。

この「近代」と「古代」の間には、「中世」と「近世」の二つの時代が挟まれている。この二つを 17 世紀初頭の徳川政権の確立を目安に区分することは学界に共有されている。「中世」後期の戦乱の時代が終り、再統一され、やがて平和が 200 年以上も続く「近世」を迎えたという認識である。この教科書もそのような枠組で書かれている。だだし、学界においては、「中世」･「近世」それぞれの、他の時代との関連づけは必ずしも安定したものでない。「近世」末期においては、両者を武家支配の時代として連続的に考えることがあり、それは西洋から「封建制」概念が輸入されたときにも踏襲された。これに対し、1960 年代からアメリカの学者の示唆によって「近世」を「中世」と切断し、「近代」の前提が築かれた時代と見なすことが始った。経済発展のめざましい成果が見え始めたとき、西洋との接触以前に既に「近代化」の萌芽があったという解釈が提示され、人気を博したのである。この傾向はのちに韓国や中国でも再現されることになる。しかし、日本の教科書は、そのようなイデオロギー的な歴史解釈に深入りすることはない。立場を越えて共有されている四分法を基礎に、事実を記すことに留まっている。

さて、『詳説日本史 B』は日本の外界の様子、またその日本との関係をどのように記述しているであろうか付録の表 1・表 2 は外界との関係を記述した行数を概算したものである。時代区分はこの教科書の章別構成に基づき、外界の構成は、大まかに、世界全体、東アジア（インドを含む)、西洋を初めとする東アジア外の三地域に区分し、その記述量を比較してみた。

この教科書での日本の外界に関わる記述は、一頁当りの平均で 7.5 行である。1 頁当りの行数は約 29 行であるから、約 4 分の 1 を世界との関わりの記述に割当てていることにな

る。意外に日本の外界に関わる記述量は多い。

時代別に一頁当りの記述量を概観すると、外界の記述は「近代･現代」や「原始･古代」に多く、中世に少ない。意外なことに、「鎖国」の時代と見なされてきた近世でかなり詳しく取上げられている。その理由はすぐあとで説明する。

時代ごとにどんなトピックや地域に関心を注いでいるかを紹介すると、まず「原始･古代」では、東アジア全般およびインドとの関係が中国との関連とともに重視されている。原始時代については考古学的知見に基づくユーラシア東端との連続性とそれからの乖離、国家の形成期については中国の史書の史料としての援用、中国・朝鮮を介する仏教の伝来、さらに中国への使節派遣による律令その他の制度・文物の輸入などが主なテーマである。

日本の「中世」は 12 世紀に武家の政権が成立して京都の古代政権と併立し、やがて地方に武家が割拠するようになった時代である。中国では宋朝から元朝、および明朝にかけての時代、韓半島では高麗から朝鮮初期の時代に相当する。この時代については外界の記述は比較的に少なく、宋朝との貿易と禅文化の輸入、モンゴルの来襲、およびいわゆる「倭寇」などが主な話題である。倭寇に関してはその後期の構成員の主体が非日本人だったことが明記されている。また、この時代では、後に「日本」に組込まれることになる周辺部、琉球王国の形成や蝦夷地・樺太の諸民族の動きも記述される。

日本史上の「近世」は、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の三人の覇者によって築かれたというのが定説であるが、教科書もこれを踏襲している。その一方、一般に「鎖国」の時代と見なされてきたにもかかわらず、この教科書は外界の記述に一頁当り平均 7 行も割当てている。しかも、その参照している地域は東アジアより東アジアの外部が多い。その原因は、表 3 に見えるように、近世を扱う三章のうち、最初と最後の章で西洋との関係が詳述されていることによる。16-17 世紀の章ではキリシタンについて多くの記述があり、19 世紀前半の章では西洋に対する海防問題と洋学の普及に数多くの行を割いている。これに対し、真ん中の 18 世紀の章では外界に関する記述が少ない。外交関係のあった朝鮮、および漢学への言及を除き、ここでは伝統的な「鎖国」のイメージを確認することができる。

さて、「近代・現代」であるが、19 世紀半ばの西洋に対する開国および明治維新から現在までをカバーする。名称上は「近代」と「現代」と両方を使っているが、5 つの章をそのいずれかに分類しているわけではない。これは、「近代」と「現代」の区分が時代とともに変化し、定説がないと執筆者たちが考えたからであろう。学界では、戦後にはロシア革命が境目とされ、次いで大日本帝国の崩壊が境界とされたが、現在は 1960 年代の高度成長期、さらに冷戦の終りを目安とするという見方も提出されている。

「近代･現代」における日本の外界の記述は平均 11 行であり、1 頁の 38%も割り当てている勘定になる。世界全体･東アジア･東アジア外でのなかでは東アジアの外部が最も多い。しかしながら、興味深いのは、章ごとにこれらの比重が異なる点である。表 3 によると、「近代国家の成立」の章では、世界全体の記述がなく、東アジアの外部が東アジアを上回る。これは、近代がアメリカによる開国要求から始り、かつ明治維新における改革が主に西洋化

によって行われたと認識されているためである。東アジアの外部では、ヨーロッパの記述がアメリカやロシアを凌いでいることが興味深い。他方、個別の国への言及は朝鮮と中国がもっとも多い。中国への言及は東アジアの国際環境の説明の際としてなされることもあるが、国家間の関係としては朝鮮との関係の記述が最多である。これは、朝鮮との国交更新から韓国併合に至るまで、朝鮮との関係が日本外交の最も緊切な課題であったからであろう。次の章は「二つの世界大戦と東アジア」と題されている。表題どおり、東アジアとの関係の記述が東アジア外の 1.4 倍に上る。個別の国で中国との関係の記述が圧倒的に多いように、日中戦争に至る過程が重視されているためである。ただし、以前の章と比べると、世界全体の記述が急増している点が目を引く。これは第一次世界大戦のヴェルサイユ講和会議を初めとして、日本が世界大の条約機構に参加したことから来ている。いわば日本が「列強」の一員となったことが、このような形で表現されていると見うるが、この教科書が大国化を誇るような記述をしているわけではない。東アジアの外部では、ヨーロッパに代ってアメリカが首位になった。これは日米戦争だけでなく、アメリカが第 1 次世界大戦後に世界政治のプレーヤーになったことを反映していると思われる。

第二次世界大戦直後の「占領下の日本」ではアメリカの記述が他を圧倒する。かつ日本から独立した韓国・朝鮮や中国への言及は少ない。占領下で両国との外交が存在せず、朝鮮戦争に伴う特需を除き、経済関係も乏しかったためであろう。次は「高度成長の時代」であるが、ここでも同様の傾向が、韓国・中国との国交回復の記述を除き、続いている。他に興味深いのは「世界全体」の記述以外にヨーロッパが登場しなくなったことである。最後の「激動する世界と日本」は他の章と異なって、関係の記述より地域ごとの状況説明が多い。その中では、中国への言及が比較的に多く、中東が初めて登場している。

以上、世界の中でどの地域に注目しているかを通観してみた。東アジアの扱いに絞ってまとめ直すと、原始･古代および中世では当然ながら東アジアがほとんど全てであるが、近世以降では東アジアの外部が登場し、しかも東アジアの記述より多いという意外な特徴が見られた。東アジアの内部構成に目を向けると、原始･古代ではインドを含むアジア全体および中国への言及が圧倒的に多い。これに比べると、朝鮮への言及は、東アジア全体の概況説明の中で言及されることがあるとはいえ、時代を通じて意外に少ないと言えるだろう。

次に、日本との関係でどんな分野に着目して外界を記述しているかも、見ておこう。表４－a・b によると、原始･古代では文化移転が半数以上を占める。文物･制度すべてを中国・インド･朝鮮から輸入したことによるのは言うまでもない。古代初期の王権は朝鮮半島に侵攻したにもかかわらず、無文字社会であった。したがって、考古学的調査に加えて中国王朝の正史が史料として援用される点が特徴的である。中世においては、貿易が国家の外交と別に行われたことへの言及が多くなっている。戦争を含む外交の記述はどの時代でも多く、とくに近代･現代では約 4 分の 3 を占めるに至っている。「鎖国」の時代と目されてきた近世でも半分以上になっているのは、先に述べた事情による。戦争を取出してみると、全体では

5 分の 1 を占める。そのほとんどは中世の蒙古来襲と近代･現代の戦争であり、原始･古代や近世では極めて少ない。日本史が時代ごとにかなり異なる相貌を見せたことがこのような形で示されていると言って良いだろう。

２）他の歴史教科書：東京書籍と清水書院

次に他社の教科書も比較のために瞥見する。一つは、市場で二番目の占有率をもつ東京書籍の『新選　日本史 B』2014 年版、他は清水書院の『高等学校　日本史 B』2016 年版である。

この二者の章別構成は山川とあまり変らない。いずれも文科省の学習指導要領に従っているからであるが、細かい点の構成は異なる。目立つのは山川版では一緒にされている「近代」と「現代」を 1945 年を境目に区別している点である。とはいえ、山川版でも帝国の時代とその崩壊後の時代ははっきり区別されているから、内容的に大差はない。現在までの日本では、「戦前」と「戦後」の時代区分が重視されてきており、それが教科書でも踏襲されているわけである。2016 年の時点で「戦前」も「戦後」もおよそ 70 年余、ほぼ同じ長さを持つようになっている。

さて、これら三種の教科書の間には、外界と東アジアの扱いにどのような違いがあるだろうか。以下では、山川版で意外な結果をえた「近世」に絞って検討しよう。表 5－a・b・c を対照すると、まず近世全体について見ると、東書の外界への言及が山川より少なく、逆に清水に多いことが分る。少ない東書でも一頁当り 6 行を超えるから、山川で発見した意外な傾向は他の教科書にも共有されているのではないかと考えられる。

これに対し、地域バランスを見ると、山川版と東書版で東アジア外部の記述量が東アジア内部を上回るのに対し、清水版では逆に東アジアがその外部をかなり上回る。表 6 の一頁当りの行数を見ても同じ傾向が確認できる。同じ指導要領の下でも、教科書によってかなり異なった歴史解釈がされているのである。

この由来は恐らく著者の違いから来ている。清水版の近世は、主に中世末期から近世初期の国際関係史の専門家、荒野泰典によって書かれたものと思われる。荒野は、1980 年代からこの分野の解釈変更に力を注いできた最も有力な研究者であった。「戦後」における近世初期の国際関係の研究がもっぱらキリシタンを初めとする西洋との関係に注目し、西洋への「鎖国」を強調してきたのに対し、彼は、むしろ近隣の朝鮮･中国・琉球・蝦夷地・東南アジアなどとの関係に目を向け、キリシタン追放の後にもこれらとの関係が維持された事実を実証的に示し、「鎖国」に代えて、「海禁」という漢語を東アジア共通の国際関係の文法として日本についても使うように提唱した。日本の学界は今日、最後の点はともかくとして、彼とその共同研究者が提唱した近世日本の「四つの口」という解釈を通説として承認するようになっている。

清水版は荒野の解釈を十二分に盛ったものである。筆者はこの近世初頭の東アジアと東アジア外とのバランスは妥当と判断する。山川や東書の近世初期の扱いは、「戦後」のアメ

リカによる占領期に形成された西洋の圧倒的存在というイメージを引きずったもののようで、今日の学界の常識から見ると時代遅れではないかと思われる。とはいえ、清水版における国際関係の記述は国内の記述とのバランスからみるといささか過剰かもしれない。他方、近世の中期や後期に注目すると、三社の傾向は似ている。中期においては外界の記述が少なくなり、ヨーロッパへの言及が皆無となる。例外は漢学の普及である。このような扱いは歴史の実際を反映しているが、今日の学界の最先端では、漢学の普及が後の明治維新の重要な前提条件となったことが注目されているので、いずれ改訂が必要となることであろう。また、18 世紀末以降において西洋の記述が増え、東アジアが減るのも三社共通の傾向である。これも明治維新との関係、とくに維新後に急激な西洋化が行われた事実を考えると、妥当な判断と思われる。

いま「近世」以外については定量的な分析が行えないが、通読した印象では、三社の教科書は近世と同様な傾向を持つようにみえる。東書が主に国内に関心を注ぐの対し、清水は特設記事として、東アジア・北海道・満州移民・沖縄などの「地域史」を、「女性の社会史」と並んで設けており、山川以上に外界およびそれとの関わりに深い関心を注いでいるように見える。

２．日本史の研究動向

日本の高校用歴史教科書は、主に大学の教員によって執筆される。中等教育の教科書にアカデミズムのメンバーが関わりをもたない中国や、中等教育の教員が深く関与する韓国とはかなり異なっている。また、教科書の執筆者と政府との関係も両国とは異なっている。学習指導要領という大枠は守らねばならないが、具体的な中身については、清水について見たように、かなりの自由度がある。

これは、教科書の内容が学界での研究動向とかなり密接なことを意味する。国史にもかかわらず、外界の記述がかなりの比重を持つこともそのせいである。山川の序文には次の文言がある。「日本史は、私たちの住む日本列島の中での人々の歩みを探るものであるが、その歩みはさまざまの地域との交流の中で、その影響を受けつつ展開してきたものである。したがって私たちは日本史を学ぶ場合、いつの時代についても、周辺の国々をはじめとする各地域の歴史や日本と諸外国との関係に目を向けていく必要がある」。

日本史を世界、とくに近隣との関係の中で再定位することは、この数十年の日本史学界の流行であった。ただ、古代史の場合、これは古くからの伝統であった。律令の輸入が古代国家の骨格を作り、かつ唐令が日本律令の注釈書から復元されたことに明かである。しかし、中世や近世については、これを始めたのは筆者と同世代の学者、先の荒野泰典や村井章介らであった。村井は中世後期の専門家であり、いわゆる「倭寇」が日本・朝鮮･明といった国家をまたぐ海民集団であったことを明かとし、当時の東アジアには近代のような国家本位とは別の秩序原理もあったことを示した。また、19 世紀半ばの日本史の専門家である筆者は、近世から 19 世紀末の東アジア全体を取扱った大学レヴェルの教科書『大人のための近

現代史　19 世紀編』（東京大学出版会、2009 年）を編集した。日本・朝鮮・清朝･琉球の伝統社会がロシア・イギリス・アメリカの登場とともにどう変化したか、また、その相互関係がどう推移したかを述べた書であるが、従来の近代史における国際関係の記述が日本内部からの視点のみで書かれてきたことに対し、朝鮮や中国などの外部からの視点も同時に理解できるように構成したことが新しい点である。

このように、過去数十年における日本史学界では、いわば「東アジアの発見」というべき流行が生れ、それは従来の「孤立した国日本」というイメージを崩していった。それが、高校レヴェルの日本史教科書にも反映されてきたのである。

しかしながら、この方面の研究が十分かというとそうではない。とくに、近代に関しては、帝国時代の日本領・植民地、沖縄や北海道を初めとする境界領域、およびこれらの間を移動した人々の実証研究は始ったばかりであり、筆者の次の世代が積極的に取組んでいる（例えば、塩出浩之『越境者の政治史　アジア太平洋地域における日本人の移民と植民』名古屋大学出版会、2015 年など）。それらが蓄積されるならば、いずれより広い視野に立つ日本通史も可能となることだろう。

むすび

現在、日本史の研究と教育は、その外界との関わりをどう位置づけるかという点で岐路に立っている。学界では、中世や近世の研究は、近代のそれと異なって、流行が下火になりつつあるように見える。他方、つい最近に生じた隣国、中国や韓国との関係悪化は、東アジアの中に日本を位置づけるという研究動向に冷水を注いだ。若い世代が「内向き」になり、国内や西洋との関係ばかりに目を注ぐように退行する可能性もなくはない。

教育の世界では、高校の新設科目「歴史総合」が成功するか否かが重要である。文科省は、次世代がグローバル化の中で生抜けるよう、近現代に絞って日本史と世界史を融合しようという目的を立ててこの科目を設計しつつあるが、これに学界や教育界が協力するか否かは明かでない。また、グローバル化と言っても、東アジアと欧米の間のバランスをどう取るかも明かでない。内外から押寄せる政治圧力を超えて、長期的に有意味な解が得られるか否か、予断を許さないというのが現在の状況である。

表1　山川　地域別の記述行数

列1	世界全体	東アジア・インド	非東アジア	総計(A)	頁数(B)
まえがき・特設ページ	5	9.5	0	14.5	4
第Ⅰ部　原始・古代	22	300	0	322	79
第Ⅱ部　中世	27	207	4	238	70
第Ⅲ部　近世	18	271	359	648	94
第Ⅳ部　近代・現代	390	669	808	1867	167
総計	462	1456.5	1171	3089.5	414

表2　山川　一頁あたり記述行数(A/B)

列1	世界全体	東アジア・イ	非東アジア	総計
まえがき・特設ページ	3.6	2.4	0.0	3.6
第Ⅰ部　原始・古代	4.1	3.8	0.0	4.1
第Ⅱ部　中世	2.8	3.0	0.1	3.4
第Ⅲ部　近世	6.0	2.9	3.8	6.9
第Ⅳ部　近代・現代	2.3	4.0	4.8	10.9
総計	7.0	3.5	2.8	7.5

表3　山川詳説世界史B(2015)における重要語句(太字)・コラム・特設ページ・年表・地図の記述

列1		世界全体	東アジア・インド	朝鮮	中国	台湾	東南アジア	南アジア	中央アジア	西アジア	ヨーロッパ	ロシア	アフリカ	アメリカ	非東アジア	総計
まえがき	教科書	5													5	5
	重要語句															
特設ページ(大山を立て)	教科書		9.5	3.5												9.5
	重要語句															
第Ⅰ部　原始・古代	教科書	22														22
	重要語句															
1章　日本文化の形成の前史	教科書		20													20
	重要語句		102	72	27	3										102
2章　古代国家の成立	教科書			8	3											11
	重要語句			14	68											167
3章　貴族政治と国風文化	教科書															0
	重要語句															0
小計	教科書	22	20	11	3											41
	重要語句		280	86	115											201
第Ⅱ部　中世	教科書	27														0
	重要語句															0
4章　中世社会の成立	教科書															0
	重要語句															0
5章　民族社会の変容	教科書		23		18											41
	重要語句		111	23	3											29
小計	教科書	27	23	11	18											41
	重要語句		391	109	118											230
第Ⅲ部　近世	教科書	18														0
	重要語句		4	4												4
6章　海禁体制の成立	教科書															0
	重要語句		40	5	15											20
7章　海禁体制の展開	教科書															0
	重要語句		76	4	28											51
8章　海禁体制の動揺	教科書															0
	重要語句			8												8
小計	教科書	18	53	9	40											27
	重要語句		116	17	43											71
第Ⅳ部　近代・現代	教科書	28														0
	重要語句															0
9章　近代国家の成立	教科書		10		40											50
	重要語句		14	106	70											190
10章　一つの世界と東アジア	教科書				28											28
	重要語句		15	178	29											222
11章　古代の日本	教科書				4											4
	重要語句		2	34	178											238
12章　産業革命の時代	教科書															0
	重要語句		5		26											31
13章　資本主義と日本	教科書															0
	重要語句		9		15											24
小計	教科書	28	10	10	15											53
	重要語句		31	140	318											489
総計	教科書	462	300	329	286.5	64	13	74	55	49	1456.5	35	806	150	201	1171
	重要語句		1156	1156	1170	300	111	80	29	10	669	35	346	110	201	808
	合計	462	1456	1485	1456.5	364	124	154	84	59	2125.5	70	1152	260	402	1979

表4-a　山川　分野別の言及行数

列1	史料	文化移転	交易	外交・戦争	戦争（左(	列7
第Ⅰ部　原始・古代	60	211	18	51	14	340
第Ⅱ部　中世	4	37	58	79	40	178
第Ⅲ部　近世		192	78	308	24	578
第Ⅳ部　近代・現代		218	305	1417	503	1940
総計	64	667.5	459	1855	581	3036

表4-b 山川　分野別の比重

列1	史料	文化移転	交易	外交・戦争	戦争（左(	列7
第Ⅰ部　原始・古代	18%	62%	5%	15%	4%	100%
第Ⅱ部　中世	2%	21%	33%	44%	22%	100%
第Ⅲ部　近世	0%	33%	13%	53%	4%	100%
第Ⅳ部　近代・現代	0%	11%	16%	73%	26%	100%
総計	2%	22%	15%	61%	19%	100%

表5ーa　山川　近世の地域別比重

列1	世界全体	東アジア	東アジア外	世界総計
第Ⅲ部　近世	82%	18%	0%	100%
6章　幕藩体制の成立	0%	46%	54%	100%
7章　幕藩体制の展開	0%	100%	0%	100%
8章　幕藩体制の動揺	0%	20%	80%	100%
小計	3%	42%	55%	100%

表6　山川　近世の一頁当り行数

列1	世界全体	東アジア	東アジア外	世界総計
第Ⅲ部　近世	18.0	4.0	0.0	22.0
6章　幕藩体制の成立	0.0	3.9	4.7	8.6
7章　幕藩体制の展開	0.0	3.9	0.0	3.9
8章　幕藩体制の動揺	0.0	1.0	3.8	4.7
小計	0.2	2.7	3.6	6.4

表5ーb　東書　近世の地域別比重

第3章　近世社会の形成と庶民文化の展開	世界全体	東アジア	東アジア外小計	世界総計
1章　ヨーロッパ文化との接触と国内統一	27%	26%	47%	100%
2章　幕藩体制の成立	0%	41%	59%	100%
3章　近世社会の発達と町人文化	16%	84%	0%	100%
4章　幕藩体制の動揺と庶民文化の発達	0%	8%	92%	100%
小計	11%	36%	53%	100%

表6ーb　東書　近世の一頁当り行数

第3章　近世社会の形成と庶民文化の展開	世界全体	東アジア	東アジア外	世界総計
1章　ヨーロッパ文化との接触と国内統一	4.6	4.4	8.0	17.0
2章　幕藩体制の成立	0.0	3.4	4.9	8.3
3章　近世社会の発達と町人文化	0.3	1.6	0.0	1.9
4章　幕藩体制の動揺と庶民文化の発達	0.0	0.5	5.2	5.7
小計	0.7	2.2	3.2	6.1

表5ーc　清水　地域別比重

第3編　近世	世界全体	東アジア	東アジア外	世界総計
1章　中世から近世社会へ	11%	55%	34%	100%
2章　幕藩体制の成立と国際関係	0%	71%	29%	100%
3章　幕藩体制の展開と元禄文化	16%	84%	0%	100%
4章　幕藩体制の動揺と化政文化	6%	15%	78%	100%
小計	6%	62%	32%	100%

表6ーc　清水　一頁当り行数

第3編　近世	世界全体	東アジア	東アジア外	世界総計
1章　中世から近世社会へ	2.1	10.3	6.3	18.6
2章　幕藩体制の成立と国際関係	0.0	11.9	4.8	16.7
3章　幕藩体制の展開と元禄文化	0.2	1.2	0.0	1.5
4章　幕藩体制の動揺と化政文化	0.4	1.1	5.4	6.9
小計	0.5	5.1	2.6	8.2

第三章 幕藩体制的发展和元禄文化	0.2	1.2	0.0	1.5
第四章 幕藩体制的动摇和化政文化	0.4	1.1	5.4	6.9
合计	0.5	5.1	2.6	8.2